

売薬の意匠あれこれ 〈その27〉 売薬のポスター【その④】

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

今回は近年少なくなった薬の特売の広告やお知らせを取り上げてみます。

昔は冬の感冒流行期前の秋口には風邪薬の特売のお知らせが、夏のあせもの出来やすい季節の前の春過ぎの頃にはあせもの予防でよく使われた「シッカロール」の特売のお知らせがメーカーや代理店（ディーラー、問屋）から薬局（小売店）へとありました。

その内容は「割り増し」（添付のこと）といって通常の納入価

（10個で5,000円：1個当たり500円の仕入れ値）に対して、例えばさらに5個割り増しをして15個を同じ納入価5,000円で納入（1個当たり333円）するものです。薬局がそれを消費者に販売するに当たって仕入れ値500円の時の販売価で販売するか、季節ものはそれなりに値引きした特価で販売するかは小売店の判断に任せられました。

さらに特売には小売店や消費者向けにさまざまな景品が付いていました。

①「カオール」

「仁丹」と同じ懐中薬の範疇に含まれるカオールの発売25周年記念（大正11年（1922））の特売のお知らせです。懐中薬とは懐に忍ばせておいていつでも使える現代では口中清涼剤と呼ばれるもので、チューインガムなどが該当します。

逆算すると、カオールの発売は明治30年（1897）ということになり、仁丹の発売開始の明治38年（1905）よりも古い薬ということになります。

この案内には割り増し案内の他に、割り増し口に応じて本革製の鞆、銅製の火鉢や革製の座布団が記念品として贈呈されると案内されています。

②「シッカロール」

現代のような冷暖房の完備した家屋ではなかった昔、特に夏場の汗疹（あせも）対策には欠くことのできない薬がシッカロールに代表される「汗知らず」でした。

風呂や行水から上がった後はもちろんのこと、近所の空き地や縁日に遊びに出かける時も、蚊帳に入る前も、また夏に限らず床屋で散髪を終えた後も首筋あたりへシッカロールをハタキタものです。

明治39年（1906）に開設された和光堂薬局に始まる和光堂ですが、このチラシは大正10年の春季特売、割り増し案内チラシです。

③「一滴目薬」「威和胃腸薬」「清腸」

昭和13年（1938）当時の消費者向けの抽選券付き特売案内のチラシで、1等は金十円、2等は金五円…（総数1,000本）。当たりすべてに威和胃腸薬が呈上されるというものです。

チラシには「銃後の保健と治病に」との言葉が書かれ3年後の対米開戦を控えた大陸での戦争が抜き差しならない状況になっている時世がこのチラシからも読み取れます。

④「ツムラ風薬 消熱散」

医療用漢方製剤最大手のツムラ（旧名称（株）津村順天堂）は、故津村重舎翁が明治26年（1893）に設立した会社で、医療用に進出する前は婦人薬「中将湯」や入浴剤「バスクリン」などで有名でした。このチラシの津村順天堂は重舎翁の実弟の津村岩吉翁が設立した会社で、かつては胃腸薬「ヘルプ」などで有名でした。

大正11年の特売チラシには、景品として配る日めくりカレンダーや店舗用の事務服（当時の事務服はこのような形でした）が描かれています。

⑤「頓服 発汗 解熱新薬」

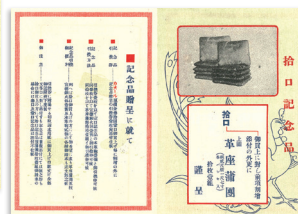
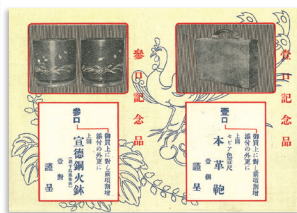
大正11年の特売チラシで足袋のような物を履いて走るランナーが描かれています。

「『MARATHON』マラソン印 速く・能く・効く」とありますが、現代でも正月の一大イベントとして関心の高い、箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競争）が始まったのは大正9年（1920）ですので、その風景を取り入れたチラシのようになります。

景品は手拭い、裏地、銘仙（かすり）1反（幅37cm×長さ約12m50cm）、湯沸かしなどです。



①



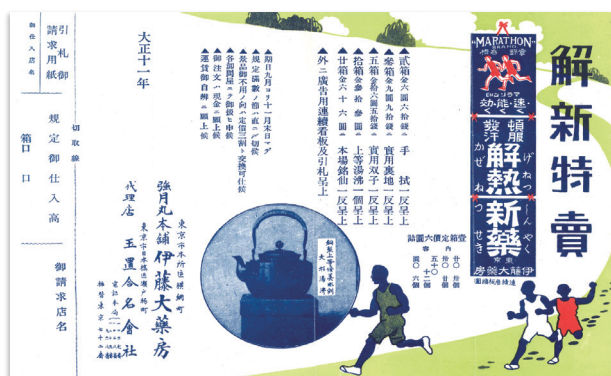
②



③



④



⑤